

もう一つの江戸期女子教育

文学部 中野節子

平成六年四月二十八日受理

はじめに

図1は、江戸時代の女性の礼法を教えた記事の一部をとったものである。「女諸礼しつけ方図」のタイトルがあり、風俗、時宜(辞儀)の仕様、姿、盃の仕様を示した部分で、大体は袖から手を出していない。盃の仕様には、「盃をいたたくより吞て返すまで、た(他)の手をつき、右の片手にてすべし。」という詞書を付している。図でも、右片膝を浮かして、左に傾いた姿勢がみてとれるが、このような仕草は、今の私達には少々なまめかしいポーズに見えないだろうか。

昨年の志雄町での歴史講座(開放センター共催)に集った女性達に、これが江戸時代の良家の女性の作法です、と言ったら、やはり意外だという反応が殆んどであった。一般に、江戸時代の女子は、女大学の教えのもと、貞節を守るためにも、このような仕草は許される筈はない、という通念が強いのではなからうか。

テキストとしての「女大学」にしても、先きの礼法を取録した『女節用文字彙』(一七六二年刊)にしても共に、江戸時代に望まれる女性を育てるための女性用教本である、女子用往来に属する。女子用

往来は、主に教訓系往来と用文系往来などの分類があり、それらは、女訓的教えを中心に編まれたもの、手紙文を中心に編まれたものなどを指している。ただし、女子用往来には、その他の情報が多く取録されていて、さながら女性百科辞典の様相をもつものもある。先きの礼法記事も、その他の情報の一種である。中には、和漢の名女の人物伝をとりあげて、女子の手本とするものもある。

人物伝は言葉だけの教訓とは異って、具体的に読者の注意をひき、有効な教育効果を得られることが多い。江戸時代の女性を考えてみる時、この人物伝をとりあげてみるのも良い方法ではなからうか。

1 『本朝女鑑』の女性達

女子用往来にとりあげられる人物伝には、それに先行したいくつかのテキストがある訳だが、その一つは、一六六一(寛文元)年に京都で発行された『本朝女鑑』である。

『本朝女鑑』とは、仮名草子女訓物の一種である。当時の文化人の間では、その頃、社会的に抬頭してきた町人等も対象とした、啓

図1. 女性の作法



『江戸時代 女性生活絵図大事典』(大空社)
2巻 290頁より転載

蒙的活動が推し進められていた。この『本朝女鑑』も、女子の徳性教育をねらった、日本女性の人物伝である。その作者は不詳だが、今のところ、仮名草子作家で僧侶でもあった、浅井了意（一六一二—一九一）ではないかと考えられている。

この『本朝女鑑』で、一般女子の手本としてとりあげられた女性達八五名は、賢明、仁智、節義、貞行、弁通に分類されている。この分類は、前漢の劉向作の『古列女伝』（前三二—三七成立）の分類に習ったものである。『古列女伝』の分類は、この前後に、賢い母としての母儀伝と、悪女の説話を集めた孽嬖伝を加えて、全七項をたてている。『本朝女鑑』で母儀伝をたてなかったことに、何か深い理由があるのか、今は考えが至らないが、いわゆる賢い母親達は、一応は賢明、仁智に収められている。

本書には、各々の分類項目についての説明はないので、『古列女伝』による説明でみておくと、賢明は社会の綱紀をわきまえ節を守り、そのことで災いを避ける、仁智は事の禍福を予め知見し、危険を避ける、節義は誠心勇敢に節義を守り死をも辞さないという女性達を収録する。貞行（『古列女伝』では貞順）は道を修め信念を通して再嫁しない例、弁通は禍凶に当って弁舌で難を避ける例をあげている。さて、『本朝女鑑』に関しては、青山忠一氏の論考が既に定評を得ている。『本朝女鑑』でとりあげられた女性達から指摘されることの一つは、「美貌で慈悲深い女性像は、（中略）日本の烈女の特徴というべきもの」だという。まずその点を確認してみたのが、表1であるが、ここでは賢さに関する表現も付け加えておいた。記述の仕方の一例をあげておくと、仁智の左近藏人頼員妻（※2）は、「幼き時より才智あり、みめかたち又人にすぐれ、心ざま情深く、物ごとに智慮ある女房なりければ……」と記されたものである。

表によると、美しさを指摘しているものとしては、貞行で二二例と最も多く、賢明、仁智で約半数、節義、弁通は多くはない。情緒

の表現において、情深い、やさしさだけでは貞行が計七例で最も多い。慈悲深いなどを入れると、賢明、仁智で約半数、節義、弁通は少い。先きにもたように、青山氏は情緒の典型に慈悲深いという表現をとりあげられたが、それは、仏教と関わる女性の場合により多く用いられている。江戸時代の他書における女性表現をも考え合わせると、情深いを特徴的とした方がよいように考える。

さて、『古列女伝』では、これらの点はどうかであろうか。まず『古列女伝』では全体に、容姿や性格に関する記述は殆んどみえない。美しさは、まず問題にならないらしく、説話の性格上必要な場合に限られているが、その殆んどが孽嬖伝においてである。そこには、美しいが貞節を守らない女性によって国が減じる例が列挙されている。『古列女伝』では、名女の特性に美しさを付さないことで、外観よりも心のもち方を女性達に重視させようとしているようにみえる。この点、日本の名女は美しくもあってほしいのである。

やさしい、情深いなどの表現も『古列女伝』にはない。私達はその具体的な説話の中から、彼女らの性格をよみとるしかない。継子を大切にする。夫の死後も貞を守るとある説話では、確かにやさしさ、情深さもうかがわせるものもあるが、むしろ、そうあるべきという徳目に準じる姿の方が強烈である。その点、日本の名女は、まずやさしく、情深いのである。

このように、青山氏の言う、日本女性は美しく情深くあってほしいのだという指摘は適切である。ただ、先きの表によって明らかになように、各分類により各々の相関がある訳で、この点少し細部に立入ってみることにしたい。

賢明や仁智、弁通ではその項目柄当然ともいえるが、知恵深い、聰明、才智、才弁な女性達が多く、特に弁通には集中している。一方、節義、貞行の項目には全くみえない。

まず賢明について、『古列女伝』では、主に国政に従事する夫、ま

表1 『本朝女鑑』名女の特性

人 名	美しさの表現	情緒の表現	賢さの表現
(賢明) 倭迹々日百襲媛命 神功皇后 弟、媛 衣通姫 都藍仙 馬飼歌依妻 上毛野形名妻 膳手大娘媛 舍利尼 中将姫 壇林皇后 皇太子歿子 余佐藏子 源信僧都姉 二位尼 松下禪尼	かたち世にすぐれ 顔形たぐいなし 顔形美しさ比なし 容貌すぐれ 形顔すぐれ、たおやか 眉目かたち比なし 容貌世にすぐれ 眉目形比なき美人	心ざしすなお 心ざしいさぎよい 慈悲深 慈悲深、婦道 心ざま優比なし 慈悲深、婦徳 慈悲深 仁義	知恵、賢し、計略深い 賢にして智略 天性聰明、利根 学問・知恵すぐれ 知恵深 聰明比なし 才智 才智並なし
(仁智) 忍坂大中姫 幡梭皇后 棚津姫 和珥童女君 光明皇后 京極御息所(※1) 左大臣兼雅公妻 冷泉大納言隆房卿妻 土肥實平妻 左近藏人頼具妻(※2) 結城親光妻 楠帯刀母 菊池入道寂阿妻 山名陸奥守妻 清水上野守妻	顔形麗しく 容貌美し 無双の美人 みめ形世にすぐれ みめ形人にすぐれ みめ形優	邪なし 邪なし、人を敬ぶ 情の色深 情あり 慈悲深 情深 心様優にやさし 婦道、慈悲深、情かける 物のあはれ知り慈悲深	仁智 才智 才智、智慮 才智 才智 才智
(節義) 狭穂姫 弟橘媛 田道妻 赤石海人乙女 栲幡娘姫 狭夜姫 兎名負處女 仏御前 横笛尼 源渡妻 和泉三郎妻 右京亮時治妻 越中守護三妻	みめ形世にすぐれ 容貌うるわし みめ形世にすぐれ 世に比なき美人	情の色深	

佐介貞俊妻 亀寿丸乳母 瓜生判官母 那須五郎母 兵部少輔某妻 武田勝頼妻 柴田勝家妻			
(貞行) 髪長媛(※3) 玖賀媛(※4) 平城之采女 遊女宮木 有子内侍 大磯之虎 葵、宿衾 小宰相局 中納言局 建礼門院 左衛門佐局 勾当内侍 元姫子 鳥井與七郎妻 奈良左近妹	面貌すぐれる 世にすぐれて麗し 容貌いみじく世に比なし みめ形麗しく みめ形麗しく みめ形美し 葵・みめ形世にすぐれ 形世にすぐれ 容色比なし 姿たおやか顔麗し みめ形世にすぐれ 容顔比なし	情の色深 心ざし優、情深 心ざま優、情の色深 宿衾・心の色深 心ざますぐれ、情の色深 情深 色ごのみの女	
(弁通) 阿蘇總子媛(※5) 筑紫鷲井母(※6) 蚊屋采女(※7) 伊勢(※8) 紫式部 大式三位 伊勢大輔 赤染衛門 清少納言 和泉式部 梨壺五歌仙 周防内侍 江口遊女 二條院讃岐 待賢門院加賀 紅梅女房 近衛基通公妻 建礼門院右京大夫 待宵侍従	みめ麗し 形美し 形美し	心ざし優 心ざま正 慈悲深	才智、才弁 才弁 才弁 才智、幽玄 才智 才学智弁 才学優長 智弁 才智 才智

『本朝女鑑』(『日本教育文庫』孝義篇下所収)より

たは子供へ助言し、それが功を奏する女性が描かれている。日本の場合は、まず仏道を志す者が七例で、仏教を通じて世の法を知るところを賢さとしている。一方、助言または内助の対象者は、父一、夫三、子二、第二例で、その他、自分自身が政道をみた女性二例である。助言内容は、国政に関わるもの二、私事に関するものが三例で、国政などの公事に女性に加わることの習慣が、日本では弱いように感じられる。仁智では、左大臣兼雅公妻の例のように本項への該当が不明な場合もあるが、大体は、未来の禍いを予見しつつ、現在の徳行を積むことで未来のそれを避けうる話である。

次に、先きに貞行の方へ移ると、ここは五分類中で最も、「顔かたち比なく美し」、「情深い」の両者との相関性が強い。つまり、日本の好みのタイプが貞行に集まっているとよからう。ここに収められている説話の結末は、全て自害、入仏という形をとっている。

文中より、女性の男性への切実な思慕が明らかなのが一四例中八例を数える。他の六例中には、髪長姫（※3）の、父の天皇に添わせたいとの考えで宮中に召入れ、かえって皇子の求愛にあつたが、父の意に反すると縊死した例、奈良左近妹（※4）が兄の仇に慕われ、許す風を装って仇を殺害の上自害した例、の二つの場合は、貞という徳目に殉じているタイプである。これを『古列女伝』の貞順でみるとどうであろうか。夫と別れる、又は死別する前に夫との仲がどうであったか、その記述がないことが多い。許人の無礼を訴え入牢を辞さない召南申女、夜は保母と伝母がいなければ堂を降りずの教えを守って焼死した宋恭伯姫、入嫁の途中で許人の死に会い、その後の貞を守った衛宣夫人など、髪長媛同様、夫との愛というよりむしろ、徳目に殉じることが、強くアピールされる説話が多い。

情深さというのも、少くとも人との関わりの中で生じるのであつて、日本では、その主なる対象は夫や恋人などの男性で、女性が男性への思いを深めて殉ずるのが、最も共感を得たようである。そし

て、そのような情深い女性が好まれるのである。

節義は、貞行との共通性が強いが、先きにも述べたが、『古列女伝』では、「死を必しして避くるなし」が分類の特徴で、貞行より徳目の優先と、死という結末の形式化が目立つ。『本朝女鑑』の貞行と節義の両例の行為には、区分のつき難いものが多いが、情緒については情深いが殆んど求められていない。節義の場合、徳目が前提とされる傾向が強かったためであろうか。

『古列女伝』との違いが目立つのは、弁通の項である。弁通は本来、弁舌の功みさにあつて、「類を連ね譬を引き」、禍凶を避けることにある。『古列女伝』では、讒言により宮中の盗人の罪を得た息子の釈明に、八尋の布をもつて国王のあり方を述べ論じた楚江乙母、細道で高官の車と自分の車が接触し、軸を折られて怒る高官に、君子のあり方を述べ論じた楚野弁女らの説話を載せる。『本朝女鑑』でそれに最も近いのが筑紫磐井母（※6）で、阿曇總子媛（※5）や蚊屋采女（※7）もそれに近いが、伊勢（※8）以降、あとは全て和歌の達人、物語作家（平安期の物語作家は歌人としても優れていた）であつて、いわば文学上の才女である。

これは次節でもふれる、当時の江戸社会での和歌文化尊重に基づくものであろう。『本朝女鑑』の作者をして、日本の弁通ならば文学上の才女を、しかも才智、才弁という能力だけでとり上げさせる、そのような社会の雰囲気があつたということであろう。その後、江戸時代を通じて、女子用往来の人物伝に載る女性は、多くの場合これら平安期の和歌に秀でた女性達である。そのような意味で、『本朝女鑑』と『古列女伝』の弁通における違いは、当時の文化状況の差を象徴的に示すものといえる。

全体を通じてみると、中国で列女とされるのは、政道や道理・倫理に明らかで、弁舌のたつ女性、また、既によくいわれることだが、貞節などの徳目を頑迷な程守り通す意志の強固な女性達ということ

にならう。それに対し、日本女性の場合は、美人で、男性に情愛を注ぐ情深い女性、社会的賢さは内助の功程度ではあるが、文学的には才能ある女性ということになるであらう。

さて、情深い女性を好むということは、江戸期の女子教育にあつては複雑な問題をもちこむことになる。

女子用往來の説話でみると、深草の少将が百度通うという程の、つるの思ひを受け入れなかつた小野小町よりも、一目で局まはらに恋こがれた高僧に、手を握らせて往生をとげさせる京極の局きやうごく(寛平法皇后)の方が好まれるのである(表1※1の説話)。この辺り、情深さと貞節を守るあいだで一線を画することの難しさが理解されよう。貞節を強調する女子用往來でも、両者をめぐる状況に苦勞している様子がみられる。

II 情緒教育と女訓の矛盾

一七三五(享保二〇)年刊の女子用往來で、『当世女鑑歌人尽 女用文章唐錦』というのがある。女子用往來では早い時期のものの一つで、作者春名須磨、大坂で出版されたものである。歌人尽とあることからわかるように、和歌に関する諸記事と手習用往來手本が記事の中核である。そして、かなり女訓的傾向をもつ往來の一つである。

本書中の「女中和歌の道しるへ」をみてみよう。(一)内は、原本ではひらかなだが、読みやすいように漢字に変えた箇所である。

それと歌は我國の(風俗)にして人の心も(素直)に(柔)げるの道なれば、わきて女ハ父母舅姑(夫)にやわらかに(従)ひもて(扱)わる、ものなれば、よく和歌の道の心をつる(時)は、女の(徳)にかなふべし。

つまり、和歌の効用を、三従の女徳を伸ばすものであると述べるのである。しかし、和歌における心のやさしさは實際上、男女の間において特に尊重されたのである。

かかる正しき(筋)を心の根としてよめる歌には、人をも正しき道に(感)せしむることこそ和歌の(本意)とはいふへけれ。色好の家にあだ波かくる種とするの(類)は和歌の邪摩とやいふべき。

さればこそ誠の歌人に色(好)めるは(稀)也。和歌に恋の部あるは(深)き(子細)ある事とそ。古今集の序に(男)女の中を(柔)くると書き給へるは、実の夫婦の中の事にして：(後略)。

和歌における男女関係を、夫婦関係に読み替へようとする、強い態度を示すのである。

風ふけば沖つ白波たつた山 よはにや君かひとりいくらん
の歌も、夫婦のむつまじい仲をよんだもので、「あだなる契の男女の中の事にはあらず」と述べる。さらに、在原業平の伊勢物語にある通りの行為が本当ならば、今の世では磯ものだという人もあるのは同感だ、という。一方で和歌の道をも教えようとする時、誠に苦しい説明とならざるをえない。

この往來では、伊勢・源氏物語は、女子に読ませるべきではなく、「大和草子」、「女四書」、「假名列女伝」などを推奨している。

(万)の(草子)に(情深)きとほめたるは、大(方)は心のあだなる女なり。これを(誠)によきと(心得)なば、大なる(誤)ちあるべし。

情深きとは、父母、舅姑をいとおしみ、夫を大切にし、召使いの者

へあわれみをかけることをいうのだと述べている。

本書は、この主旨に沿って、かなり注意深く和歌を選び、逸話も紹介しているが、時には、

徳大寺の左大臣（未）だ大（納言）成ける時に、侍従といひける女のもとへ浅からず通はせ給ひけるに

宮本は（室）の（泊）りの遊女なり。みめかたち（麗）しく（情）の色も深かりしか

などの表現がみえる。和歌の教えを勧めようとすれば、この程度の表現は避けられなかつたのであろう。

一方、手習いは、当時の女性の必須の教養であつたが、本書ではその書き方を

女中の文は（墨薄）に一字く（念）を（入）れず、なだらかにやさしく（書）くべし。文字の（続）き、また（墨）の（姿様）、たとへば鳥の飛ぶが（如）く、花の（落）つるがごとく、村ごんに（書）くべし。（墨色）は（気高）く（麗）しきは（自然）のこゝなり。

と、上品ではあるが、女性的情感にあふれた書法をよしとする。ただし、作者は注意深く、このように書かれた手紙も、親類や親しい人々への祝事、余儀ない事情の折にのみ書くべきであるとしている。情深さ、やさしさを、貞節との微妙な一線を保ちながら求める、作者の立場をしのぶことができる。

儒教的教えを施しつつ、あくまで日本的な、やさしく、情多く、情緒豊かな女性を求めつづけたのが、江戸時代の女子教育だつたと

いえようか。

おわりに

単に、女大学的な教育だけが、江戸期の女子教育であつたわけでは決してない。和歌教育を通じた情緒教育も、女子教育の重要な一部分であつた。はじめにのみた作法上の仕草も、いわゆる女性らしくみえて当然で、そのような女性的情緒を、当時の社会は女性に求めていたのである。

一方、人物伝からうかがう限りでは、中国の理想的女性は、主義を守るに強く、傾向としては政治向きで、詭弁的弁才を尊ぶところあり、とみえるし、日本女性は、美しく情緒的で、文学的才能を尊ぶところがあるようである。

現在の社会にそれを当てはめようとするのは、強引には違いなからうが、何とはなく、共通性があるように思える。長い間に育まれた、社会の基調音というようなものの、変りがたさを示しているようである。

① 『仮名草子女訓占の研究』（桜楓社）中の「八、本朝女鑑」。

② 『女源氏教訓鑑』の七小町物語（大空社）『江戸時代女性生活絵図大事典』九卷所収）によれば、小町が関寺小町の姿となつたのは、「四位少将のむくひの罪の身につもりて」とある。これが当時の判断でもあつたのだろう。

③ 江戸時代の女子教育の中で、和歌教育は大きな要素を占めている。和歌教育を通して、女性のやさしさの育成をはかつたのであるが（拙稿「やさしさの女性文化」前掲、『江戸時代女性生活絵図大事典』一〇巻所収）、それは和歌尊重という文化的伝統に基づいたものであつた。当時の女子教育が、手習い、和歌、琴、絵画などを中心に編まれたことで、女性の情緒豊かさ、文学的能力を培つたものと考えられる。